

II 本部町漁業の概況

1 本部町における最近数年間の漁業生産の動向とその要因

伊野波 盛 仁・友 利 昭之助

おもに既報の水産統計をもとにして、本部町における漁業生産の動向とその要因を検討した。沖縄島の北部地区では本部町は最も漁業が盛んなところである。カツオ漁業があり、また今では、わずかに2経営体のみになったが、かつては沖縄漁業の主要漁業であった大型追込網漁業が依然として操業されている所である。本部町の漁業の中で、主要な位置を占めているのは、カツオ漁業とタカサゴ追込網漁業である。(表-1)

表-1 北部地区における市町村別漁業種類別漁獲量(昭和47年) トン

市町村	合計	近海かつお一本釣	まぐろはえなわ	網漁業	釣り漁業	その他漁業 [※]
北 部	2,595	324	712	826	451	282
国頭村	74			23	33	17
大宜味村	22			6	14	2
東 村	23			7	16	0
今帰仁村	71			8	26	37
本部町	639	324	49	<u>205</u>	61	0
名護市	1,000		663	123	115	100
恩納村	44			29	7	7
宜野座村	74			36	16	21
金武村	228			144	42	42
伊江村	337			<u>215</u>	99	23
伊平屋村	21			14	1	5
伊是名村	65			16	21	28

※海藻・動物類も含む。 第2次沖縄農林水産統計年報(47~48)P.124

〜 ほとんど追込網タカサゴ 沖縄開発庁・沖縄総合事務局農林水産部より

両漁業とも漁業形態上複雑な諸要因を内包しているため、経営的には弱い一面を保持していると考えられる。

(1) 本部町のタカサゴ追込網漁業について

追込網漁業は、沿岸・沖合海域を問わず戦前から戦後の一時期にかけて、本県の主要な漁業であった。しかしながら、昭和33年以降、タカサゴの急激な漁獲量の減少(図-2)から推測されるように、その経営体数は急速に減少している。

現在、タカサゴを対象とする規模の大きい追込網漁業は、本部町に1経営と伊江村に1経営

を残すのみである。その原因は、追込網漁業が多くの人手を要し、また厳しい労働を必要とするため、昭和30年以降、急速に伸びた他産業に対し競存できなかったためと推測される。

5トン前後の母船1隻に1トン程の動力付クリ船14隻に、漁夫30人前後を1団として周年の操業を行っている。本部町の追込網経営体の漁場は、沖縄

島周辺一帯である。そこに、80ヶ所の網の設置場所を持っていて、3ヶ月ごとに一巡する。(金城武光) 全県の70%以上のタカサゴの漁獲量を本部町と伊江村で占めていて、39年頃を最低として近年は、生産が次第に増加してきている。それは魚価の高騰によって漁夫1人当たり収入がそれ程低くないことによつてうなづかれる。

昭和48年の本部町のタカサゴの生産

$$200,000 \text{ kg} \times 400 \text{ 円} = 8,000 \text{ 万円}$$

$$8,000 \text{ 万円} \times 30 \text{ 人} = 260 \text{ 万円}$$

(2) 本部町における沿岸漁業生産の動向

昭和42年以降の魚類生産についてみると、カツオ・マグロ類の沖合、遠洋が停滞的なのに対して、タカサゴ、その他の魚類の沿岸における漁業生産は安定した伸びを示している。このような傾向は48年まで漸増しており、また同様な傾向が、伊江村においてもみられる。伊江村の追込網漁業は本部町のそれにくらべると規模が小さく老令化が著しく、また農業との兼業率も高いようである。

このような沿岸漁業生産の増大は、北部地区さらに全県民的にみても同様の傾向を示している。

(3) 沿岸漁業生産増大の要因

その主要因として県民所得の向上による生鮮魚に対する需要の増大がある。最近の鮮魚価格の高騰はそのことを示していると考えられる。すなわち魚価の高騰によって生産が刺激されているのである。

(4) 沿岸漁業生産の一つの問題点

鮮魚価格の高騰によって生産が維持され、経営が成りたっていることは、本県の魚価は他県にくらべて一般的に高いようである。もっと詳しく言うならば安くあるべき魚は高く、もっと高くあるべき魚は安いのである(表-2)。

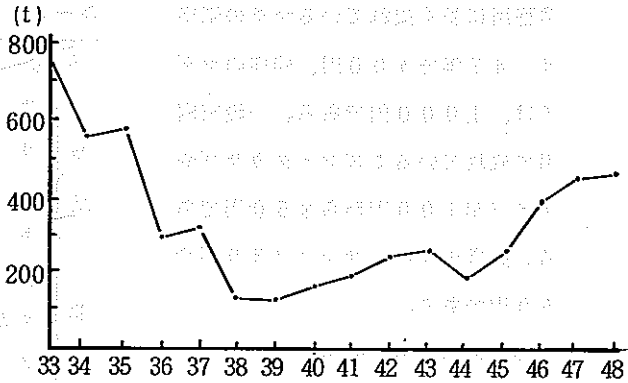


図-2 タカサゴの漁獲量の推移(全県)

沖縄の水産業(1968年) 琉球政府
沖縄農林水産統計年報(沖縄総合事務局)

業務用に多く流れているマチの価格は、47年で400円、同様のマダイは、1,000円である。一般家庭用に流れているミズン・タカサゴやアイゴが100円から250円である。同様のサバやサンマは30円や60円である。

最近における冷凍魚の移入の増大にみられるように、今後一層この傾向が強まるであろう。したがって、魚価の高騰のみによって所得を果すことが困難になってくると考えられる。

表-2 生産地市場鮮魚価格 円/kg

品名	年度	43	44	45	46	47
他 県	サバ	27	25	26	23	29
	サンマ	57	178	135	81	62
	マダイ	495	607	759	859	947
	キダイ	293	381	464	557	595
那 覇	ミズン			111	108	108
	タカサゴ	167	189	227	248	242
	アイゴ	143	164	191	229	265
	マ チ	226	249	303	366	398

資料：昭和47年水産物流通統計年報（農林省）
第2次沖縄農林水産統計年報

沖縄総合事務局